

国立歴史民俗博物館所蔵『日野家代々年号勘文自応保度至応安度』影印・翻印篇

Facsimile/Reprint Edition of “*Hinoketaidainengokannon : from the Oho Era to the Oan Era*”
in the Possession of the National Museum of Japanese History
TAKADA Sohei and NAWA Toshimitsu

高田宗平・名和敏光

はしがき

『日野家代々年号勘文自応保度至応安度』は、廣橋家に襲藏された後、岩崎家・東洋文庫に遞藏され、現在は大学共同利用機関法人 人間文化研究機構 国立歴史民俗博物館（以下、歴博と略称する）に収藏されている⁽¹⁾。本書は、歴博に於いて、廣橋家旧蔵記録文書典籍類コレクションを構成する資料の一つである。同コレクションは全九五三点、その概要は廣橋家に関する古記録・古文書・年号勘文類等である。また、同コレクションには、重要文化財に指定されている『律』（『吉部秘訓抄第一』の紙背）並びに『令義解』（『吉部秘訓抄第四』の紙背）も含まれており、夙に知られている⁽²⁾。

一方、歴博の所蔵に帰した廣橋家旧蔵記録文書典籍類以外の廣橋家伝来資料は、廣橋家・下郷共済会・東洋文庫に蔵されている⁽³⁾。

『日野家代々年号勘文自応保度至応安度』を含めた記録文書典籍類を襲藏してきた廣橋家は、藤原北家日野流を出自とし、日野兼光の五男頼資（資

実の弟）を初代とする。頼資以来、経光が『民経記』、兼仲が『勘仲記』、兼宣が『兼宣公記』を記す等、多くの日記を残している。日野家は、藤原北家真夏を始祖とする家で、紀伝道・歌学を家学とし、文章得業生を経て、文章道大業の者が任用される内記・大学頭・東宮学士・文章博士・式部大輔や、弁官、侍読等を歴任する人物を輩出した。一一・一二世紀には、文章博士世襲氏族となった⁽⁴⁾。

以上の廣橋・日野の両家は、文筆・儒学を以て家学とした家である。両家の実態を検討することは日本漢籍受容史・漢学史を研究する上で、大きな意義がある。その研究資料として、歴博所蔵廣橋家旧蔵記録文書典籍類は、極めて重要な資料群と言える。

年号勘文概観

年号は、漢字文化圏では長く採用されてきた紀年法である。我が国は、江戸時代まで一代の天皇に於いても複数回改元されてきたが、慶応から明治へ改元に当たり、天皇一代につき一年号となった。中国では辛亥革

命が起こり、清朝が倒れ、年号は廃止された。

改元は、天皇の即位、天変地異、疫病の流行、瑞祥、等の理由で行われた。改元の手続きの順序について、簡単に述べると、改元に際して、藤原・菅原・大江等の博士家の人物によって複数の年号案が勘申され、公卿が陣座に於いて、博士家の人物により勘申された勘文（「年号勘文」と言う）を討議（「難陳」と言う）する。討議を経て、二ないしは三の年号案を天皇に奏上し、年号案を最終的に決定、公布される。この一連の手続きが「改元定」の儀といい、平安時代中期から江戸時代末期まで行われた。⁽⁵⁾

博士家の人物によって、勘申された年号案には漢籍の出典が存在し、その出典が明記されている。換言するならば、年号勘文は漢籍引用文辞の宝庫である。年号勘文の特徴は、漢籍の引用文辞が比較的短文ではあるものの、数多くの引用が認められる点、また佚書からの引用が認められるケースもある点、等にある。このような特徴に鑑みるに、中国学、とりわけ校勘学・輯佚学に益するところ、大と言えよう。ただし、年号勘文に引く漢籍文辞は、原典からの直接引用ではなく、類書等を介しての間接引用の可能性も想定しなくてはならず、この問題は今後の課題としたい。

他方、日本漢籍受容史・漢学史からは、勘申者やその周辺で如何なる漢籍が受容され、講究されていたか、等の漢籍受容及び漢字の実態の解明する上で、貴重な資料となり得ると言えよう。

年号勘文の出典論に関する主な先行研究には、以下の森嶋外・森本角蔵・小倉慈司の諸氏の業績が存する。

近代に於けるその嚆矢と言えるのは、森嶋外「元号考（稿本）」である。⁽⁶⁾氏は大化から大正に至るまでの年号とその読み方、天皇名、改元年月日、出典を提示した。ただし、氏が基にした年号勘文資料の名称についての明示がない。そして年号勘文関連資料を広く渉猟し集めた年

号勘文の総合的研究である森本角蔵『日本年号大観』は、年号勘文研究に於いて、まず参照すべき研究と言える。⁽⁷⁾とりわけ出典論に関して詳細な分析がなされていることが特筆に値する。更に、近時、小倉慈司「日本の年号」は、前述の森・森本の両氏の業績、山田孝雄『年号読方考証稿』（宝文館出版、一九五〇年）、米田雄介編『歴代天皇年号事典』（吉川弘文館、二〇〇三年）等を参照し、大化から平成までの年号の読み方、天皇名、改元年月日、改元理由、年号字の出典、採用された年号案の勘申者、のそれぞれを明示した。⁽⁸⁾特に、氏の業績は、年号勘文・古記録・古文書・部類記等を広範に精査していること、調査に使用した漢籍の底本を明示していること、冷泉家時雨亭文庫所蔵『皇年代記』・石川県立図書館森田文庫所蔵『本朝年代歴』・明治七人文部省刊『御謚号及年号読例』の各書に記される年号の読み方を提示していること、等に特色があると言える。氏の業績も、森本氏のそれとともに、参照不可欠なものと言えよう。

此の如き、廣橋家旧蔵記録文書典籍類及び年号勘文の資料的な価値と、年号勘文の出典論に関する主要な先行研究について若干触れた如く、年号勘文出典論の総合的な研究は以上の諸氏により進められてきたが、個々の年号勘文資料についての個別的な検討は殆ど見られず、等閑に付されている。その中で『日野家代々年号勘文自應保度至應安度』についてもその例外ではなく、研究は管見の及ぶところ、見受けられない。従って、基礎的研究として、本書の影印に加え翻印を試み、年号勘文研究の一助となることを企図する。

註

(1) 『岩崎文庫和漢書目録』（東洋文庫、一九三四年）四二四頁に著録されている。歴博の函架番号は後述の如く、「H一六三一二七」である。なお、歴博所蔵の廣橋家旧蔵記録文書典籍類の古記録を扱った図録に『中世の日記』（国立歴史民俗博物館研究報告 第186集）がある。

俗博物館、一九八八年）、『中世の古文書―機能と形―』（国立歴史民俗博物館、二〇一三年）がある。

- (2) 『律』は前掲註(1)『岩崎文庫和漢書目録』四五二頁、『令義解』は同目録四五二頁に各々著録されている。歴博の函架番号は、『律』が「H―六三―五六三」、「令義解」が「H―六三―五六四」である。なお、『律』・『令義解』ともに鎌倉時代書写で、『吉部秘訓抄』は南北朝時代書写と見られている（宮内庁書陵部編『図書寮典籍解題 続歴史編』（養徳社、一九五一年））。

- (3) 東洋文庫所蔵の廣橋家旧蔵資料は、主に仏書・悉曇学関係典籍・漢籍である。詳しくは『岩崎文庫貴重書書誌解題』IV（東洋文庫、二〇〇四年）を参照。廣橋家記録については、廣橋家に襲蔵されたもの、岩崎家に入り東洋文庫所蔵から歴博所蔵となったもの、下郷共済会所蔵のものがあると言う（『国史大辞典』「廣橋家記録」の項（橋本政宣氏執筆））。

なお、東洋文庫所蔵『古文尚書卷第三夏書・卷第五商書・卷第十二周書』（唐代初期書写）の紙背には『元秘抄』（室町時代後期書写）が書写されており、本書も廣橋家旧蔵年号勘文資料である。本書は、現装では『古文尚書』を表としているが、元来は『古文尚書』の裏を用いて、『元秘抄』書写し、これを表としていた。同文庫所蔵『古文尚書』と同様、宮内庁書陵部所蔵九条家本『古文尚書』（卷第三・四・八・十・十三）及び東京国立博物館所蔵神田本『古文尚書』（卷第六）の両書も紙背に『元秘抄』が書写されており、三書は僚卷である（『岩崎文庫貴重書書誌解題』IV）。

- (4) 細谷勘資「日野流藤原氏の形成過程」（『史聚』二三号、一九八八年。後に「内磨流（日野流）藤原氏の形成過程」に改題し細谷勘資著・細谷勘資氏遺稿集刊行会編『中世宮廷儀式書成立史の研究』（勉誠出版、二〇〇七年）所収）に詳しい。

- (5) 森本角蔵『日本年号大観』（目黒書店、一九三三年。後に講談社、一九八三年覆刻版）。

- (6) 森鷗外「元号考（稿本）」（一九二二年。後に『鷗外全集』第二〇巻所収、岩波書店、一九七三年）。

- (7) 前掲註(5)を参照。

- (8) 小倉慈司「日本の年号」（『古語大鑑』第1巻「あゝお」所収、東京大学出版会、二〇一一年）。

【付記】本稿は、日本学術振興会 科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）若手研究（B）「日本中世漢籍受容の歴史的研究」（研究代表者 高田宗平）（課題番号二四七二〇三一一）及び日本学術振興会 科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）基盤研究（C）「中国方術理論の遡及的考察」（研究代表者 名和敏光）（課題番号二五三七〇〇四七）の成果の一部である。

【書誌事項】

影印・翻印を掲げるに先立ち、以下に書誌事項を略言しておきたい。

資料名 『日野家代々年号勘文自應保至應安度』

※歴博では右の資料名で管理されているが、資料名は後掲の如く首題の『日野家代々年号勘文事』によるのも一案か。

コレクション名 廣橋家旧蔵記録文書典籍類

函架番号 H―六三―一二二七

頁数 一軸

書写年代 〔室町時代〕

装訂 卷子装

表紙 鍔鉄御納戸色、ないしは御納戸色表紙。縦二七・二厘 横八双

含め二五・四厘（八双含めず二五・〇厘）。

外題 書き題簽「改六九」

日野家代々年号勘文自應保至應安度 一巻

『綴合もとのまゝ』

（縦二四・〇×横四・九厘）、不記載の隅切長方形の題簽（縦一五・二×横一・五厘）、下部に「11」と記された貼紙が、各々貼付されている。

見返 縦二七・二×横二四・二厘

首題 〔藤家〕

當家□□□號勘文事

各紙法量・紙数

見返、第一紙〜第一三紙、軸付紙の構成である。

第一紙は第二紙以降とは若干様相を異にするため、左記に略図図I

を用い、法量を示す。なお、以下、法量の単位は糎。

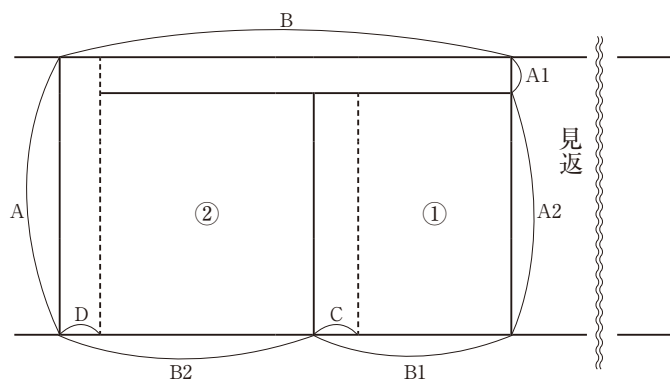


図1

縦A 二七・二 (A1二・一、A2二五・二)
横B 三四・三 (B1一・一、B2二三・二)
糊代C 〇・七 糊代D 〇・五

第一紙の②(図1参照)に記されている墨書は、巻首の①に記されている首題及び第二紙以降の本文とは別筆である。第一紙の首題の後に、応保度以前の年号事・年号勘文・勘申者等が墨書されていたが、何らかの要因で該部分が闕損したため、後人によって②に存する墨書

「^{二條院}應保度 永曆 十月四日改元
依天下痲瘡也

左大弁資長朝臣

「が書写されたかと推測される。①と

②は糊代C(図1参照)が存在し、現装では糊付けされ、一紙となっているが、元来は①と②は別紙であったのであろう。

以下、第二紙以降は横と糊代の各法量を示す。

第二紙	横 三三・七	糊代 〇・五
第三紙	横 四三・六	糊代 〇・三
第四紙	横 四三・七	糊代 〇・二
第五紙	横 四三・七	糊代 〇・五
第六紙	横 四三・六	糊代 〇・三
第七紙	横 四三・七	糊代 〇・三
第八紙	横 四三・七	糊代 〇・三
第九紙	横 四三・七	糊代 〇・四
第一〇紙	横 四四・〇	糊代 〇・三
第一一紙	横 四三・六	糊代 〇・三
第一二紙	横 四三・七	糊代 〇・四
第一三紙	横 四三・三	糊代 〇・四
軸付紙	横 七・〇	

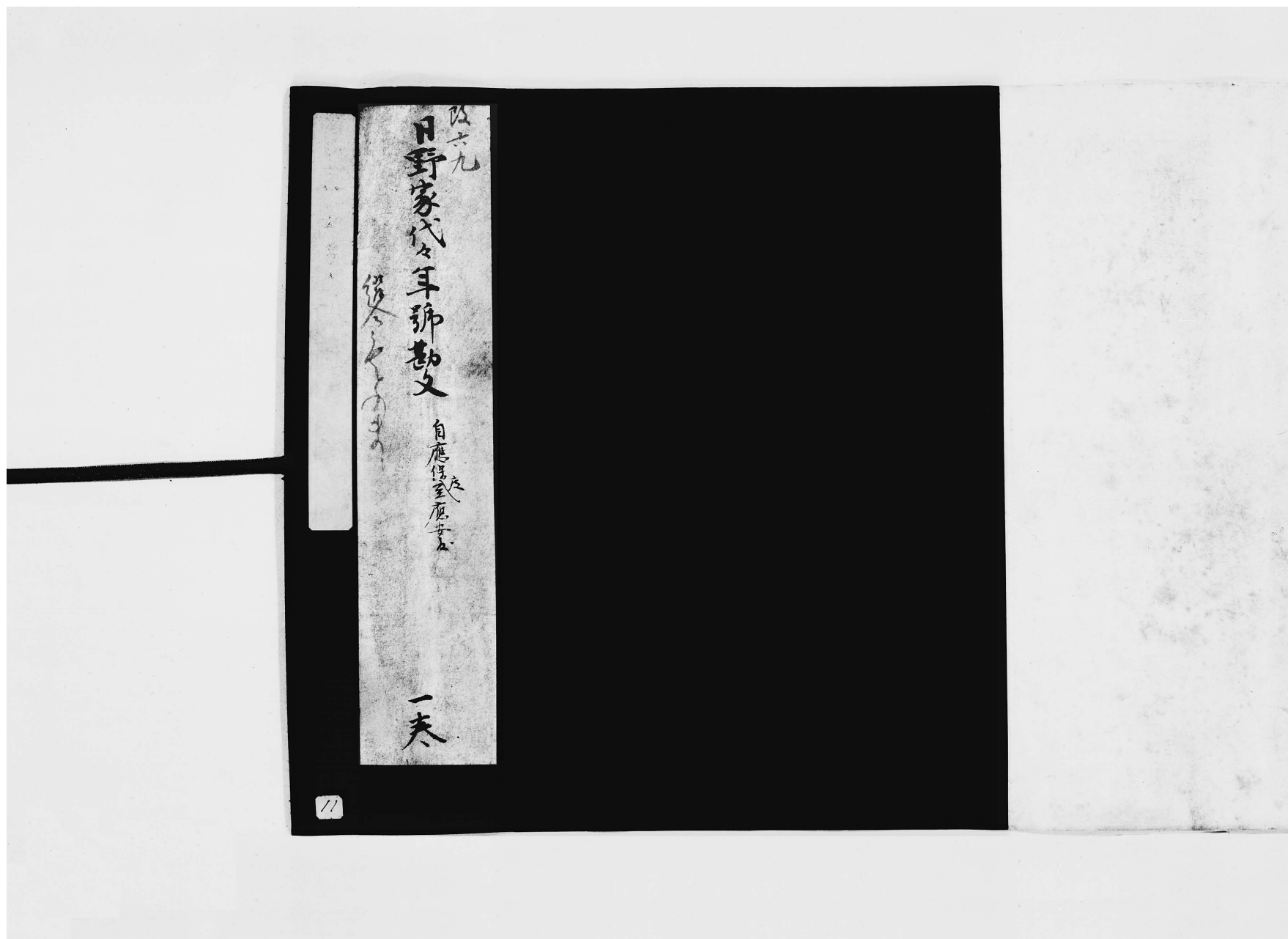
本文全一三紙。虫損を修補し、更に総裏打修補を施す。

筆跡 第一紙に後人による別筆が存するのみで、その他は一筆である。

款式 無辺無界。字高約二六・〇

紙質 楮紙

軸長 二八・七、軸の直径 一二・〇、軸先の形状は頭切(印卷)である。
緒 梅鼠色、ないしは桜鼠色。全長 七三・五



改六九
日野家代々年譜勘文

自應保至應安

一奏

11

時
當
示
疏
勅
文
事

二
應
休
皮
永
歷
十
月
日
改
之
信
云
下
死
瘡
也

大
弁
賈
長
朝
臣

天
統

論
語
疏
曰
伏
義
為
天
統
神
農
為
地
統
黃
帝
為
人
統
用
示
上
以
八
統
親
王
馭
萬
民

應
保

尚
書
曰
己
女
惟
小
子
乃
厥
惟
如
王
應
保
處
氏
已
葬
小
惟

大并賀長朝臣

天統

論無疏曰伏羲為天統神農為地統黃帝為人統
用示之以倫親王馭萬民

應保

尚書曰女惟小子乃服惟王應保厥民已辛丑惟
小子乃當服行德政惟弘大王道上下應天下安我而受
厥之眾民也

永萬變

宣統二年六月五日改元
即憤也

勅申年子事

元德

尚書曰乾元亨利貞又曰元為善之長也
一姓一万物

養元

後漢書曰受養元任以中和

政和

尚書曰世之有安以樂其政也

右依 宣旨勅申以件

宣旨勅申長官國體極殊在朝諸長

宣旨勅申長官國體極殊在朝諸長

宣旨勅申字事

養元

尚書曰受養元任以中和

政和

尚書曰天下啟而教有政應

宣旨勅申以件

宣旨勅申長官國體極殊在朝諸長

唐書曰天下殷富教有本庭

宗依宣帝勅中何仲

韓仲卿之孫仲卿直長

元
改元於戊 嘉應三年四月廿一日改元

年
春元

改元於戊 嘉應三年四月廿一日改元

兼安

尚書曰王命我宋宋安其文德之祖正義曰宋安者
兼父之意安之此氏也

韓仲卿之孫仲卿直長

安元度 嘉應五年七月廿八日改元

韓仲卿之孫仲卿直長

仁治

治德

治承度 嘉應三年八月廿一日改元

年
仁治

仁治

新原書曰太宗以寬仁治天下

治德

治德 嘉應三年八月廿一日改元

韓仲卿之孫仲卿直長

元
嘉應三年八月廿一日改元

勅中何仲卿

元德

周易曰元亨利貞正義曰元者善之長德天
元者始也

勅中一年号事

元德

周易曰元亨利貞曰元者善之長也天之
元氣始於此物

又作

孔記曰陽以寬治臣又王以文治

右依

宣旨勅中一件

建興福寺奉太徽大新之遠近極其綱要元

又治度

元曆二年八月廿四日致元
係地者也

勅中一年号事

又作

孔記曰陽以寬治臣又王以文治

禱祥

後漢書曰聖人受命而王莫不制礼作樂以著
功德切成作樂化宣制礼不以教代俗致禱祥

右依

宣旨勅中一件

建興福寺奉太徽大新之遠近極其綱要元

建久度

年号事

德仁

孔記曰道德仁義非礼不成

宣惠

後漢書曰文章宣惠惠通代泰平

仁治見之

勅中一件号左側之元

建久度

建仁元年二月廿四日致元

指中納言資實卿

孝院

元久度 建仁三年二月廿日改元

系議左大臣資實卿

建定

史記曰大聖作治建定是度

仁治

新曆云見之

建永度 元久三年三月廿七日改元

指中納言資實卿

元德

周易見之

文昭

涉疑孝經曰天文昭燦爛合出徽

建定

史記見之

弟元度 建仁三年十月廿五日改元

指中納言資實卿

建定

史記見之

承元

通鑑曰古者終以丙時曆用仲月也代相承元曰泰祥瑞

順德度

建曆度 弟元三年三月九日改元依代始也

指中納言資實卿

建曆

春秋金曆序曰帝額額曰建曆立元以天元尸子之義其和建曆或曰曆

仁治

新曆書見之

後堀河

貞應度

承久四年四月十三日改元代始也

太歲

後漢書

貞應度 承久四年四月十三日改元代始

左大弁家富之

寬惠 後漢書曰文帝宣惠遺代帝年

長春

孔說正義曰草木蕭應王者施化當
繼續長春之道謂初年長春

安貞度 古福三年十二月十日改元

左大弁家光卿

元德 周易見之

未觀 史記曰後世未觀厚金休也

寬喜度 安貞三年三月五日改元

未議左大弁家光之

未觀 史記見之

禎祥 後漢書見之

仁長

貞觀政要曰用治定之觀以仁長世之業
若乃古不易百慮同歸

貞永度 宣和四年月日改元天受地祇

柱中酒言家光之

成治 史記曰百穀用成治用明

仁治 見之

文曆度 天福三年十月五日改

左大弁家光之

仁治 又

^{四卷}文曆度 天福三年十月五日改

推中納言家光

延文 隆文曰延文学儒者數百人

文曆 唐事曰常天文曆數

仙長 貞觀政要見之

^四赤禎度 文曆三年月日改元

前中納言家光卿

仁治 新唐書見之

延文 漢事見之

仙長 貞觀政要見之

^{後宇多院}建治度 文治十二年四月廿日改元

年号事

延文 漢事見之

建宣 史記曰大聖作治建宣之法度

巡長 貞觀政要曰卜祚巡長

推中納言家光

^四新女度

弟推中納言資實

延文 隆事見之

建宣 史記見之

初安慶

帝初年納言資宣

延文 隱事見之

連定 史記見之

長祥 續文獻通考曰相長祥和天長風也

伏見院

正應慶 仁安十一年四月廿六日改元

辛卯事

延文 隱事見之

建定 史記見之

建德 唐曆曰天子建德因生

長祥 續文獻通考見之

貞正 唐曆曰見事敏建德其貞正

武部 仁安十一年

後二卷

乳元度 仁安四年十二月廿一日改元代始

帝初年納言資宣

長親 史記見之

長祥 續文獻通考見之

德治度 仁安四年十二月廿一日改元代始

帝初年納言資宣

又觀 周易見之

德治度 嘉元四年三月十日改元發吳

前代中細言候之卿

又觀 周易見之

仁興 漢書見之

仁化 隋書曰彼肅德義仁化所及孔謙之風

自朝滿野 劉子曰聖人爲治之以爵賞親仁化

春風

花園院

延慶度 德治三年十月九日改元代治

年号事

延慶

後漢書曰以切名延慶之後

慶長

毛詩巨疏曰文王德澤厚福慶延長

康永

金樓子曰魏明帝康永出諸堂

前代中細言候之卿

應長度 延治二年四月廿八日改元依疾疫也

年号事

文親 周易見之

康永 金樓子見之

又應 會要曰久應稱之永有天下

前代中細言候之卿

正和度 應長二年二月廿八日改元

依天長姓子親也

市權中領之者在後之

正和度

應長三年二月廿日改之
係天宮地宮也

重子事

康永 久之

久化

隋書曰既且箕子避地朝鮮始有八卷
禁疎而不偏尚而可久化之而感千載
不絕

永寧

史記曰東歸之後而天下永寧

希哲少師言者在後之

文任度

正和六年二月三日改元任地者也

勅中子事

天貞

老子經曰王侯得一以為天下貞

長春

北行大義曰順天之化長春萬物

右依宣旨勅中子件

造常奉長官本議在大朝若大朝資名

後醍醐

元應度

文任三年二月廿日改元代始

年子事

元應

唐書曰陛下富教安人勢農敦本先漢社稷康濟黎元之應也

康永 久之

元應

唐書曰陛下當教安人務農敦本先漢述
稷康濟黎元之應也

康永 見上

文昭 見上

市村大納言右左衛門

勘申年号事

延文

漢書曰又

天成

左傳曰地平天成 成又 平也 奉八元使布五教于

四方

右依 宣旨勘申年号

左中兵衛督藤原朝資朝

奉行藏事藤原左衛門朝資

元亨度 元應三年二月廿五日改元

勘申年号事

元亨

周易曰其德剛健而文明應乎天而行之以

元亨

天成 見上

康永 見上

右依 宣旨勘申年号

市村大納言右左衛門朝資朝

奉行藏事藤原朝資

右阮 宣旨 勘事 存

恭頌聖行壽域萬壽無疆
藤樹資朝

奉行資朗

後光嚴院

延文度

文和五年三月廿八日改元

勳年之事

文見

元寶

三元布位曰盛以自然平、錦衣裹封以三元

寶神章

右係
宣府勘
科

蘇防鴟使臣韓天
將建業來朝

同
康安度
延安年
月日改

年号事

和係

毛詩曰宜其室家與

注曰婦子也。箋云族人和則得保其家。
中々大小也。

榮慶

百書曰上順祖宗下合陪吏一邦共慶

校中納言左衛門藤原光

負^同治度
庚子年九月廿三日改元

檀中納言右京藤原朝光

貞治度 康安三年九月廿三日改元

年号事

建德 見こ

長祥 見こ

應永 見こ

檀中納言右京藤原朝光

勘申年号事

嘉禎 見こ

貞治

周易曰利或人之貞志治也

建康寺長小僧藤原朝光

應安度

年号事

寶仁

文選曰以美人為君子以珍寶為仁義

元喜

周易曰六四元吉有喜也

永和

唐曆曰近神用永和之樂

右衛門督藤原朝光

義親 又七

貞治

周易曰利義人之貞志治也

生事天吉長下壽祿是安藤樹堯

應安度

年號事

寶仁

文選曰以義人為君子以珍寶為仁義

元喜

周易曰六四元吉有喜也

永和

唐曆曰述神用永和之樂

右衛門常藤元光

〔翻印〕

凡例

○本翻印の底本は国立歴史民俗博物館所蔵の原本を用いる。

○改行、文字の挿入、傍注等の底本の様態を可能な限り忠実に再現する。

○継ぎ目は破線「……」を該当部分に記し、その下部に「(第幾紙)」と記す。

○字体はでき得る限り底本に従って翻字する。

○虫損等により判読し難い箇所は、□□で示す。ただし、その字数が推測可能な場合は字数を□で示し、墨痕等から文字が推測可能な場合は右傍にルビにて「(ㄱカ)」と記した箇所がある。その他、稿者が加えた注記も「(」で括る。

○抹消されている文字は、右傍に抹消符「こ」を記す。

○合点は「\」で示す。

藤家^こ

日野

當家^(代々年) □□ 號勘文事

(別筆)

二條院

應保度^{永曆} 十月四日改元
依天下抱瘡也

左大弁資長朝臣

天統

論語疏曰伏羲為天統神農為地統黃帝為人^(統乙) □

周礼乙

□□曰以八統親王馭万民

應保

尚書曰^(己乙)女惟小子乃服惟弘王應保殷民已辛女惟

小子乃當服行德政惟弘王道上以應天下安我所受

殷之衆民也

永萬度<sup>長寛二年六月五日改元
依御憤也</sup>

勘申年号事

元徳

周乙

易曰乾元亨利貞正義曰^(元乙)者善之長謂天之

徳力^(徳乙)始^(始乙)之乙
□□□□万物

養元

後漢書曰愛養元綏以中和

政和

礼記^(日カ)□□世之音安以樂其政和

右依 宣旨勘申如件

□□大弁兼勘解由長官周防權守藤原朝臣資長

高院
嘉應度 仁安四年四月八日改元代始 …… (第二紙)

勘申年号字事

養元

漢書曰愛養元綏以中和

嘉應

漢書曰天下殷富數有嘉應

右依 宣旨勘申如件

權中納言藤原朝臣資長

同
承安度 嘉應三年四月廿一日改元

年号事

養元

後漢書曰愛養元上綏以中和

承安

尚書曰王命我来承安汝文徳之祖正義曰承安者

承文^{〔王乙〕}□之意安定此民也

権中納言藤原朝臣資長

同
安元度 承安五年七月廿八日改元

権中納言資長卿

仁治^{〔見下乙〕}□□

治德^{〔見下乙〕}□□

同
治承度 安元三年八月四日改元

年号事

仁治

新唐書曰太宗以寬仁治天下

治德

准^{〔南乙〕}□子曰治性者不以性治德者不以德以道

権中納言藤原朝臣資長

後鳥羽院
元暦度 寿永三年四月十六日改元代始

勘申年号事

元德

周易曰乾元亨利貞正義曰元者善之長謂天之

元德^{〔始乙〕}□□万物

文治

礼記曰湯以寬治民文王以文治

右依 宣旨勘申如件

造興福寺長官參議左大辨兼遠江権守藤原朝臣兼光

同
文治度 元暦二年八月十四日改元
依地震也

勘申年号事

文治

礼記曰湯以寬治民文王以文治

禎祥

後漢書曰聖人受命而王莫不制礼作樂以著

功德功成作樂化定制礼所以赦代俗致禎祥

右依 宣旨勘申如件

同
造興福寺長官參議左大辨兼遠江権守藤原朝臣兼光

建久度

年号事

德仁

礼記曰道德仁義非礼不成

寬惠

後漢書曰文章寬惠遭代康平

仁治見上

権中納言藤原朝臣兼光

土御門院
元久度 建仁四年二月廿日改元

參議左大弁資實卿

建定 史記曰大聖作治建定法度

同
仁治 新唐書見上

建永度 元久三年四月廿七日改元

権中納言資實卿

元德 周易見上

文昭 御注孝經曰天文昭煥潤合幽微

建定 史記見上

同
承元度 建永二年十月廿五日改之

権中納言資實卿

建定 史記見上

順徳院
承元 通典曰古者祭以西時薦用仲月近代
相承元日奏祥瑞

建暦度 承元五年三月九日改之依代始也

(第三紙)

(第四紙)

権中納言資實卿

、建暦 春秋命歴序曰帝顓頊曰建暦立紀以天元尸子之義其和造暦或為暦

仁治 後堀川 新唐書見上

貞應度 後堀川 承久四年四月十三日改元代始也

左大弁家宣卿

寛惠 後漢書曰文帝寛惠遭代康平

長養 礼記正義曰草木蕭廡王者施化當繼續長養之道謂勸民長養

安貞度 同 嘉禄三年十二月十日改元

左大弁家光卿

元徳 周易見上

嘉観 史記曰從臣嘉観厚念休烈

寛喜度 同 安貞三年三月五日改元

參議左大弁家光卿

嘉観 史記見上

禎祥 後漢書見上

弘長 貞観政要曰開治定之規以弘長世之業者乃古不易百慮同歸

貞永度 同 寛喜四年 月 日改元天變地震

権中納言家光卿

成治 史記曰百穀用成治用明

仁治 見上

文暦度 四糸院 天福二年十一月五日改

権中納言家光卿

延文 漢書曰延文学儒者數百人

、文暦 唐書曰常天文暦数

弘長 貞観政要見上

(第五紙)

同 嘉禎度 (九) 文暦二年 月 日改元

前中納言家光卿

仁治 後宇多院 新唐書見上

延文 漢書見上

弘長 貞観政要見上

建治度 後宇多院 文永十二年四月廿五日改元

年号事

延文 漢書見上

建定 史記曰大聖作治建定法度

退長 貞観政要曰卜祚退長

権中納言藤原 (資宣九)

同 弘安度

前権中納言資宣卿

延文 漢書見上

建定 史記見上

長祥 伏見院 脩文殿御覽曰調長祥和天之嘉風也

正應度 伏見院 弘安十一年四月廿八日改元

年号事

延文 漢書曰見上

建定 史記見上

建徳 唐暦曰天子建徳因生

長祥 脩文殿御覽見上

貞正 唐暦曰見事敏速性甚貞正

民部卿藤原資宣

後二条 乾元度 後二条 正安四年十一月廿一日改元代始

前権中納言俊光卿

(第七紙)

嘉観 史記見上

長祥 修文殿御覽見上

徳治度 ^同 嘉元四年十二月十四日改元變異

前権中納言俊光卿

〔第八紙〕

文観 周易見上

仁興 漢書見上

仁化 隋書曰被露德義仁化所及礼讓之風
自朝滿野
劉子曰聖人為治之以爵賞觀以仁化
養民

花園院

延慶度 徳治三年十月九日改之代始

年号事

延慶

後漢書曰以功名延慶于後

慶長

毛詩注疏曰文王徳深厚福慶延長

康永

金樓子曰魏明作康永休諸堂

前権中納言藤原俊光

應長度 ^同 延慶四年四月廿八日改元依疾疫也

年号事

文観 周易見上

康永 金樓子見上

久應 會要曰久應稱之永有天下

前権中納言藤原俊光

正和度 ^同 應長二年二月廿日改之
依天變地震也

季号事

康永 見上

〔第九紙〕

久化

隋書曰既旦箕子避地朝鮮始有八条之
禁疎而不漏簡而可久化之所盛千載
不絶

永寧 史記曰東歸之後而天下永寧

前権中納言藤原俊光

文保度 ^同 正和六年二月三日改元依地震也

勘申年号事

天貞

老子經曰王侯得一以為天下貞

長養

〔五乙〕

□行大義曰順天之化長養万物

右依宣旨勘申如件

後醍醐 造東大寺長官參議左大辨藤原朝臣資名

元應度 文保三年四月廿八日改元代始

年号事

元應

唐書曰陛下富教安人務農敦本光復社

稷康濟黎元之應也

康永 見上

文昭 見上

前権大納言藤原俊光

勘申年号事

延文

漢書曰見上

天成

左傳曰地平天成 成又平也 舉八元使布五教于

四方

右依宣旨勘申如件

〔第一〇紙〕

左中弁兼文章博士藤原朝臣資朝

奉行職事藏人左衛門佐資^(朝)

^同元亨度 元應三年二月廿三日改元

勘申年号事

元亨

周易曰其德剛健而文明應乎天而行是以

元亨

天成 見上

康永 見上

右依宣旨勘申如件

藏人頭正四位下行左兵衛督兼文章博士藤原朝臣資朝

奉行資朝朝臣

^{後光嚴院}延文度 文和五年三月廿八日改元

勘申年号事

延文 見上

元寶

三元布經曰盛以自然雲錦囊封以三元

寶神之章

右依宣旨勘申如件

藏人坊鴨河使左少辨兼文章博士越中介藤原朝臣忠光

^同康安度 延文六年 月 日改^{(三)(二十九)}

年号事

和保

毛詩曰宜尔家室樂尔妻帑

注曰帑子也箋云族人和則得保其家

中之大小也

〔(第一一紙)〕

承慶

晉書曰上順祖宗下念臣吏万邦承慶

^同貞治度 康安二年九月廿三日改元 權中納言兼右衛門督藤原朝臣時光^く

年号事

建德 見上

長祥 見上

應永 見上

權中納言藤原時光

勘申年号事

嘉觀 見上

貞治

周易曰利武人之貞志治也

造東大寺長官參議左大弁藤原朝臣忠光

^同應安度

年號事

寶仁

文選曰以美人為君子以珍寶為仁義

元喜

周易曰六四元吉有喜也

永和

唐曆曰迎神用永和之樂

右衛門督藤原忠光

〔(以下、軸付紙)〕

〔(第一三紙)〕

高田宗平（国立歴史民俗博物館研究部非常勤研究員（研究支援者））
名和敏光（山梨県立大学国際政策学部）

（二〇一三年四月一六日受付、二〇一三年九月一八日審査終了）